

# 名古屋外国語大学海外派遣プログラム成果報告書

2024 年 11 月 4 日

学部・学科名 世界教養学部 国際日本学科

担当教員氏名 早津 恵美子

1. 区分	中期留学 ・ 語学研修 ・ <span style="border: 1px solid black;">海外実習</span>
2. プログラム名称	海外日本語教育実習 (授業科目「日本語教育実習 C (海外)」)
3. 渡航先国名	韓国
4. 派遣期間	2024 年 8 月 31 日 (土) ~ 2024 年 9 月 14 日 (土) 15 日間
5. 派遣先教育機関名	釜山外国語大学校
6. 参加学生数	6 名
7. 派遣目的	協定校である釜山外国語大学校日本語融合学部の学への日本語教育実習
8. 派遣内容	9 月 1 日 (日) オリエンテーション参加 9 月 2 日 (月) ~12 日 (木) 教育実習 (指導担当教員ほか様々なレベルの授業見学、自身の授業準備、教壇実習、それに対する指導担当教員からのフィードバック、等) 9 月 13 日 (金) 修了式
9. 成果	釜山外国語大学主催のこの日本語教育実習プログラムには、今年度、本学を含め日本の 5 大学が参加しており、実習生の総数は 18 名である。各実習生に指導担当教員がついて個別に非常に手厚い指導をしていただけるとともに他大学の学生との協働作業もあり、それらを通して学生たちは多くのことを学んだ。参加学生のうち 4 名が 2 期の IJLE 学生のチューターを希望したことも頼もしい。
10. 備考	引率者 8 月 31 日 (土) ~9 月 3 日 (火) 早津恵美子 9 月 11 日 (水) ~9 月 14 日 (土) 齋藤絢

## 日本語教育実習を通して

大学4年生となり将来についてより深く考えるようになった今、この経験は、将来について考える上で大きな役割を担うものとなった。

今回の釜山外国語大学での日本語教育実習に参加し、たくさんの様々なことを感じ、学ぶことができた。本実習では、日本語の教授法や知識について学ぶだけではなく、母国や母語が違う学生に日本語を教えることの難しさややりがいについても学ぶ、良い機会となった。本文では、釜山外国語大学における日本語教育実習を通して、感じたことや学んだこと、考えたことを述べる。

私の担当クラスはA2で、「住まいと住環境」というトピックを扱った。そのクラスには20名の学生がいた。私は、今まで教壇実習を行った経験が無く、教案を作成した経験もなかった。初めて日本語教育実習に参加した私は、授業準備がこんなにも大変で、奥深いことを知らず、非常に難しく感じた。また、釜山外国語大学では、「can-do シラバス」が採用されている。そのため、私にとって「教科書が無い」ということが最も大変な課題となった。

まず、実習期間の前に、〇〇先生に「教案だけでも完成させておくと良い」というアドバイスをいただき、実習期間前から全4回コマ分の教案の作成に取り組んだ。Can-do シラバスということで、「理解」、「やりとり」、「表現」、それぞれにおいて、何ができるようになれば、学生にとって有意義な授業になるのかということを考えて。そこで、「住まいと住環境」というテーマに基づいて考えた結果、「表現」（一方的に書く）機会は少ないのではないかと考え、主に「理解」、「やり取り」で授業を構成することにした。また、日本語を学ぶ動機付けになると考え、日本の文化について、韓国と日本の違いなどを紹介するセクションも積極的に設けた。

教壇実習の前半の期間では、自身の課題が浮き彫りとなった。まず、静かな学生が多く、全体に問いかけても返答が得られないことが多くあり、聞き方を工夫することが求められた。また、授業準備の段階で、学生が分からないだろうと思って出した問題に正解したり、反対に、分かっているだろうと思って出した問題が不正解となったり、臨機応変な対応が求められる場面があり、想定外のことに思えられる、豊富な日本語の知識の必要性を感じた。学生が間違えた場合に、どのように間違いを正すのかということが難しく、すぐに解答を教えてしまい、考えさせることができなかった。さらに、絵や写真を説明するときに「この韓国の“やつ”が〜」や「こういう”感じ”になります」など、初級の学生にとっては分かりづらい言葉遣いをしてしまうことがあった。このように、初級ということで、「言葉のコントロール」が非常に難しかった。そこで、授業見学を人一倍行い、様々な先生や生徒の授業を見学させていただくことで、改めて、良い授業にするためには何が必要なのかを考え直した。

実習の後半の期間にかけては、教材の試行錯誤や〇〇先生との話し合いを通して、より良い授業へと少しずつ変わっていった。課題となっていた「指名方法」は、先生に、「学生を

ランダムにテンポよく指名していくと良い」というアドバイスをいただき、個人を指名するようになったことで、学生は、解答が分かっているか分かっていなくても、発言をしてくれるようになった。また、学生が解答を間違えた際には、すぐに正しい解答を言うのではなく、少しずつヒントを出しながら、学生自身に解答を導いてもらうことができた。しかし、授業で使用する言葉のコントロールについては、意識してはいたが、完全に直すことはできなかった。具体的には、「～たり～たり」という文型を使ってもらいたいときに、「魚釣りはしませんか」ではなく「魚釣ったりとかしませんか」という表現になってしまったことなどである。

最後の授業では、授業が終わった後、たくさんの学生が、私のもとに集まってきてくれた。「先生の授業、楽しいでした」、「僕も先生みたいに日本で先生したいんです」、「先生の授業、すごくためになりました」、「先生の授業受けられなくなるの、悲しいです」など、たくさんのあたたかい言葉をかけてくれ、この実習の中で、はじめて、先生として認めてもらえたのだと感じ、非常に嬉しくあたたかい気持ちになった。それまでの教壇実習では、学生の反応が少なく静かなクラスであったため、「伝えられたいことが伝わっているかな」と常に不安な気持ちを持っていたが、安心して発言してもらえるよう、とにかく終始笑顔であることを意識して実習を行ってきた。しかし、その最後の瞬間では、本当に心から笑顔になれた気がする。それらの学生からもらった言葉は、何よりも最高のフィードバックであっただろう。

以上のように、国外である韓国という地で、日本語教育実習をさせていただいた経験は、私を大きく成長させてくれた。また、「将来これがしたい」という明確な目標は無かった私だが、この経験を通して、異なるバックグラウンドの人々と関わることの楽しさや難しさを感じ、「様々な外国人と関わる仕事がしたい」と考えるようになった。そして、改めて、それができる会社にエントリーをし、就職活動を再開することを決意した。このように、この実習は、教授法や知識について学ぶだけでなく、「将来」についても深く考え直すきっかけとなった。たくさんの楽しいこと、苦しいことがあったこの実習で得た、自身の強みや弱み、そして成果や反省点を、今後の生活に活かしていきたい。

最後に、このような素晴らしい機会を与えてくださった名古屋外国語大学、釜山外国語大学の先生方、お忙しい中、時には深夜まで教材の相談にお付き合いくださった〇〇先生、授業を見学させていただいた先生方、実習生の方々、そして、私の拙い授業にも真剣に向き合ってくれた学生の方々、本当にありがとうございました

## 釜山の實習を振り返って

私はこの實習でたくさんの人との出会いがあり、たくさんのことを学びました。

私はこの實習で、学習者である釜山外国語大学の学生が楽しく、学生が主体となった授業を行いたいという目標を下に授業を行っていきました。そして、私は名古屋外国語大学で、日本語教育プログラムの他に、国語の教職課程も履修しています。なので、教育に関わるすべての知識、大学で学んだすべての知識を生かした實習にしたいと思い、實習を行いました。

釜山外国語大学での日本語の授業は、教科書がなく、CAN-DO statement で授業が展開されています。私は1期にIJLEの教育實習の事前指導を行いました。そして、2期にはIJLEで大学内の留学生の前で授業をする予定です。その際は、教科書を下に授業を考えていました。なので、教科書を使わない授業をするのは初めてだったので、最初は、なにをしたらいいのかわからず、とても苦労しました。しかし、担当の先生の助言を下に、学習者がCAN-DO statementが達成できるような授業を展開することができたと思います。

この實習で、「自分らしさ」の大切さを学んだ気がします。特に自分の特技を生かした授業展開ができたのはとてもよかったです。私は、小さい頃から書道を習っていて、書道を生かした授業を試みたいとずっと思っていたので、この實習でそれを実現できたことはとてもうれしかったです。また、授業を受けてくれていた学生のリアクションもとてもよく、感動しました。授業内では自分の日常生活や、過去の経験について話すことで、日本人のこと、日本文化のことなど、日本語以外の日本についても学生は学ぶことができたのではないかと思います。そして、韓国のことを日本語で話し、韓国について教えてもらうなど、日本語を使って、日韓の文化交流もできたのではないかと思います。

釜山外国語大学の實習が終わった後も、私の實習を行ったクラスとは、今でもZOOMやKAKAO TALKを通して、連絡をしています。そして、私の實習を行ったクラスメイトの一人が日本への交換留学が決まったという連絡をもらいました。2週間だけでしたが、自分が日本語を教えていた人が、日本に留学に来るといふ、この嬉しさは日本語教師のやりがいの一つだなと思いました。この實習を通して、日本語教師のやりがいに気づかせてくれたのではないかと思います。

また、私は今年の2月の短期語学研修で、釜山外国語大学で韓国語を勉強しました。その際は、学生としてお世話になり、今回は實習ではありませんが、先生として、経験することができました。海外の、同じ大学で「学生」として、「先生」として、どちらも経験す

ることは中々できないことだと思います。このような素晴らしい経験ができたという釜山外国語大学は私にとって、成長をもたらしてくれる場所だと思いました。

私はこの実習で、本当に人に恵まれました。今後、この実習で出会った人への感謝は絶対に忘れずに生きていきたいと思っています。